

日本ファッションにおけるポップカルチャー的背景に関する研究

—戦後日本のポップカルチャー資料収集を中心に—

The study about the influence of the pop culture for the Japanese fashion
—The historical materials collection about the connection of Japanese fashion and pop
cultures after World War II—

田中 里尚^{*1+}, 中村 仁^{*2+}, 梅原 宏治^{*3+}, 工藤 雅人^{*4+}, 古賀 令子^{*1+}
Norinao Tanaka^{*1+}, Jin Nakamura^{*2+}, Koji Umehara^{*3+}, Masato Kudo^{*4+}, Reiko Koga^{*1+}

*1 文化女子大学服装学部 東京都渋谷区代々木 3-22-1

Faculty of Clothing Science, Bunka Women's University,
3-22-1 Yoyogi, Shibuya-ku, Tokyo, Japan

*2 東京大学大学院情報学環

Interfaculty Initiative in Information Studies, the University of Tokyo

*3 立教大学文学部、社会学部 非常勤講師

Faculty of Arts, Faculty of Sociology, Rikkyo University

*4 東京大学大学院 学際情報学府 学際情報学専攻

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : The purpose of this research collect and arrange documents and historical materials to determine how pop culture influenced the fashion in Japan after World War II. In 2010, we firstly collected previous fashion and popular culture studies done in foreign countries. We found many intriguing studies, but we came upon one which was particularly noteworthy. As a means of clarifying the relationship between fashion and pop culture, we collected books written by Angela McRobbie. Second, we collected music magazines for their representative examples of Japanese fashion, since fashions are often influenced by musicians. Through analyzing the fashions represented in music magazines, we proposed a hypothesis that a musicians turn to them as models for their own fashion expression. Third, we collected magazines about “costume-play” as examples of pop culture. As a result, we hypothesized that magazines about “costume-play” seems to transform themselves into fashion magazines in later years. Fourth, we joined an international association about Japanese pop culture fashion, because many scientific studies on Japanese pop culture fashion are done in foreign countries. In addition, we interviewed organizers of a pop culture event in Thailand. We

*1) nori-tanaka@bunka.ac.jp

learned that fashion as a Japanese pop culture was popular in Thailand, with Thai youth at its core. In addition, we discovered that they held an event for new Japanese pop culture and were planning to promote Thailand as a destination suitable for Japanese sightseers.

共同研究の目的

ポップカルチャーという言葉は、90年代以降特殊なジャンルを指示する用語として用いられてきた。基本的には、アジア諸国が注目する日本のマンガ、アニメ、ゲーム、ポップスを総称するカテゴリーの名称として使用されているのである。これら日本のポップカルチャーは、「クールジャパン」や「ジャパニーズクール」などと呼ばれ、世界的に注目されてきている[1][2]。

こうしたポップカルチャーの1つとして注目されているのは日本のストリート・ファッションである。例えば、「渋カジ」スタイルに端を発すとされる制服スタイルは、ポップカルチャーであるマンガやアニメを通じて受容され、現実のファッションとなっている[3][4]。

しかし、ポップカルチャーやファッションなどはアカデミズムにおいては研究の俎上にのりにくいことも事実である。これらの文化は、私的かつ瑣末なもののみなされる傾向が強く、研究においては2次的な意味しかもたせられていなかった。そのため、これらに関する資料は散逸し、集中的に収集されていないという現状がある。また、ファッション研究の分野においても、ファッション・デザイナーに照準を合わせた作家研究および作品研究[5]、またはファッション・ビジネスに関して主に寄与することを念頭において行われる社会調査を中心に行われてきた[6]のために、ポップカルチャーとファッションの関係性は明確に位置づけられているとはいいがたい[7]。

そのため、本研究は、ポップカルチャーとファッションとの関係性について解明しうる可能性を持つ資料収集を第1の目的とする。こうした資料収集を通じて、新しい伝統として生み出されつつある日本のポップカルチャーの史的展開を跡付け、ジャパニーズ・ファッションのインキュベーターとしてのポップカルチャーの役割を明確にすることを第2の目的とする。

本年度は、第1に海外におけるファッションとポップカルチャーの関係性の研究の代表として、英国のカルチュラル・スタディーズ派の一人である Angela McRobbie を中心とした文献資料を収集した。第2に、音楽とファッションの関わりを示す資料として『Rockin' on Japan』を中心とした音楽雑誌を収集した。また、文化学園図書館に収蔵されていない雑誌で、2000年代のファッションを解明するうえで重要なものを選定して収集した[8]。第3に、「クールジャパン」として世界に評価されている文化現象のうち、ファッションと関わりが深い「コスチュームプレイ」を取り上げている資料で、文化学園図書館に収蔵されていないものを中心に収集した。また、ドレクセル大学等で行われている日本のポップカルチャー関係の学会へ出席し、その現況を探った。

結果および考察

【1】ファッションとポップカルチャーに関する理論的研究

Angela McRobbie はイギリスにおけるポピュラーカルチャーの中心的研究者である。特に、“The aftermath of feminism gender, culture and social change” (2009) や “Feminism and youth culture” (first edition 1991 second edition 2000) などが代表的で、女性とポピュラーカルチャーおよびファッションとの関係性、そしてそれを媒介するファッション雑誌の重要性に関する研究を多数行っている。その論は、フェミ

ニズムという主張からなされるものであるが、ポップカルチャーとファッションとの関係性を考えるうえで、無視しえない視点を含んでいる。したがって、McRobbie のポップカルチャー研究の著作で文化学園図書館に収蔵されていないものを収集した。また、McRobbie が指摘する「Code」は言説であり、この言説の研究の出発点である Michel Foucault の論文および講義録に関する著作も収集した。

こうした収集の成果を発展させて、共同研究者である工藤雅人はファッションブランド ANREALAGE の批評を試みた。ここではファッションに「批判」として対峙するのではなく、間断なき対話の循環として現れるファッションデザインの可能性を抽出している。ファッションデザインを社会の否定性としてのポップカルチャーとして解釈し、対話を増幅させる装置として理解したことが成果である[9]。

【2】音楽というポップカルチャーとファッションの接近

文化学園図書館はファッションを中心とした雑誌の収集を行っている。そのため、音楽というポップカルチャーからもたらされるファッションの資料としての音楽雑誌が必ずしも多くはなかった。今年度は、80年代後半から90年代にかけて、大型CDショップが誕生し、海外の音楽を若者が比較的自由に消費できるようになったのち、それらの視覚的情報を日本の若者に伝えた雑誌として『Snoozer』（リトルモア 1997 創刊）を収集した。また、『Rockin' on Japan』（ロッキンオン 1985 創刊）を日本のアーティスト情報の代表的雑誌として収集した。そして、それらの分析から、音楽というポップカルチャーとファッションの関係性の仮説を構築した。

音楽はそもそも、音の進行と重なりを楽しむ聴覚的文化であり、視覚的刺激と触覚的刺激を楽しむファッションとは、特に交差することもなかった。しかし、なぜ音楽とファッションという関係性が観察されてきたのだろうか。根本を考えると、音楽に影響を受けたファッションという言い方は不正確なのではないか。むしろ、音楽を演奏しているプレイヤーに影響を受けたファッションということが正しい。

では、音楽プレイヤーがどのようにしてファッション・リーダーとなったのか、という問題に対しては、ビートルズやウッドストックなどに出演したロック・ミュージックの演奏者が影響を与え、さらにビデオクリップ専門のTV番組であるMTVの発生がその影響関係を加速させたといえるのだが、一方、日本ではどうだろうか。本共同研究では、この音楽とファッションの交差現象を歴史的にたどるのではなく、『Rockin' on Japan』という雑誌の近年における表象を分析することを通じて、アーティストのモデル化が誌面上で必然的に進行していることを明らかにした。

すなわち、音楽情報を雑誌媒体に掲載する場合、音響情報ではなく視覚情報が優位になり、アーティストの言葉やライブ情報だけでない立体的な編集を行おうとすればするほど、アーティストの写真が必要とされ、そのファッション性が希求されるという関係にあることが明らかとなった。当然のことともいえるが、TVやDVDなどの複合メディアに比べて、単一の情報メディアである雑誌の場合、文字のみならず写真を掲載し、それが必然的にファッションを含みこんだ情報として読みうるということが明らかとなった。

【3】「クールジャパン」とファッション

フランスで行われているJapan Expoはアニメ・マンガを中心とする「クールジャパン」現象の祭典である。そこでは、ファッション現象としてコスチュームプレイ(Costume Play 以後コスプレ)が行われていると同時に、日本のファッションがポップカルチャーの一つとしても数え上げられている。翻って日本では、ファッション消費は原宿や渋谷といった地域を中心として行われる一方で、コスプレという変身遊戯の文化は秋葉原や池袋といった地域で行われているように、両者は地域的にも、消費者層としても連続性のない現象と

いえる。しかしながら、フランスを中心とした海外において、ファッションとアニメやマンガなどが並列して消費されることで、そのこと自体がファッションの日本的意味や地政学を変え、影響を与える可能性は否定できない。

そのため本共同研究では、コスプレの種類やファッションへの発展可能性を調べ、現在流通しているコスプレに関する雑誌を収集した。その代表的なものとして、音羽出版の『コスBON』(2007 創刊)がある。この雑誌は不定期刊行であるが、Vol.2-3(2008)では「コスプレイヤーが作るコスプレイヤーのための本!」という宣言文が表紙に記載されているのに対し、Vol.4-5(2009)では「コスプレイヤーに贈るコスプレファッション誌」と変化している。この「ファッション」という語彙の使い方が、ファッションとしてのコスプレ意識が高まってきた証左といえよう。

『コスBON』の Vol.1 の目次では、「コスBON 巻頭グラビア32ページぶち抜き!!」というグラビアページの充実や「コスプレ衣装の作り方:本誌グラビア衣装を作っちゃう」という実製作に関する囲みの特集記事や「コスプレが際立つ「生地」の大辞典! ユザワヤ徹底大解剖!」などのような服飾知識の記事など、極めて1950年代の「服飾雑誌」的な色彩の強い内容だ。しかし、Vol.4の目次は、現在のファッション雑誌的な洗練されたものになっている。例えば、記事タイトルも素朴なものではなく「NIGHT IN HUIS TEN BOSCH」といった詩的な命名法などが使用されている。すなわち、教育装置から夢の舞台装置へというファッション雑誌の変化そのものをコスプレ雑誌も生きてきているのだ。また、Vol.5 でもメイクに関する記事にファッション誌的な洗練された編集のあり方を観察することができる。

コスプレ本は今や、単に上手なコスプレイヤーを撮りためたスタイルブック的あり方よりも、より洗練されたコスプレを紹介する雑誌に変化してきている。このことは、コスプレのファッション化といえるのではないだろうか。これに対して、『MEN'S NON-NO』の2010年1月号がマンガのキャラクターを表紙に起用したり、『COMMON SENSE』(issue38)がマンガのキャラクター的イメージを売りにしている芸人をモデルとして起用したり、という試みも増えている。特に後者のモデルとして起用された人物は、コスプレの中心的素材となる新世紀エヴァンゲリオンの登場キャラクターを模している。このことから、ファッションとポップカルチャーの交差現象が生じていることがわかる。

【4】ポップカルチャーの海外での捉えられ方

近年、諸外国の日本のポップカルチャー・ファッションを学術研究の対象とするケースが増えている。例として、ニューヨーク州立ファッション工科大学(FIT)附属美術館では JAPAN FASHION NOW と題した展示[10]が行われ、川久保玲氏を初めとした日本のデザイナーの作品と並び、ゴシック・ロリータや制服などさまざまなポップカルチャー・ファッションが展示された。また、ドレクセル大学(米国ペンシルバニア州フィラデルフィア)で開催された国際学会「Fashion in Fiction」においても日本のポップカルチャー・ファッションに関する研究発表が複数行われており、関心を集めた。

また、タイでは従前から日本のポップカルチャーへの関心が高く、近年では2009年に在タイ日本大使館・国際交流基金及び現地ファッション誌「Cawaii!」との共催による「Kawaii Festa - meet the Kawaii Ambassador -」や、コミック等のイベント「COMIC PARTY」など、多くの日本文化に関するイベントが開催されている。日本政府も外務省ポップカルチャー発信使(通称:カワイイ大使)の派遣などの協力措置を講じている、日本文化に関する先進事例地域である。また、タイ政府も観光庁による「タイ王国コスプレ観光大使」の任命や日本への派遣などの事業を行っている。本研究はこれらの多くのイベント並びに「タイ王国コスプレ観光大使」に関し、主導的に関与しているイベントオーガナイザーへのインタビューを行うこ

とで、実態を明らかにすることを目的とした。

インタビューにおいて、タイにおいて日本のポップカルチャー全般が親しみ深い存在であり、これらを扱う店舗は若者文化の中心地にあり混在していること、また前述の「タイ王国コスプレ観光大使」はタイが安全で日本人にとって親しみ深い地域であることをアピールし、若年層の旅行者を呼び込むことであることが述べられた。また、国内での視察の結果、日本で発行されているファッション誌のタイ語版が書店のファッション関連の書架に多く並んでおり、大型商業ビル等でも日本のファッション誌のコピー等をディスプレイに使用している事例は多く見受けられたが、日本で販売されているファッション関連商品はほとんど販売されていなかった。インタビューでは主に価格面の影響が大きいということが述べられた。

上記のインタビューから、タイでは若者を中心にファッションも含めた日本のポップカルチャーが人気であることだけでなく、自国で新たな日本発ポップカルチャーに関わるプロジェクトを行うことで、日本人にとってタイが観光に適した地域であることをアピールしていることが明らかとなった。

註と文献

1. 「特集 世界に羽ばたく日本のポップカルチャー—クールジャパンから発信される地域の魅力」『自治体国際化フォーラム』241 自治体国際化協会 (2009-11)
2. 「特集 人間文化研究機構 第6回公開講演会・シンポジウム 国際日本文化研究センター創立20周年記念事業 世界に広がる日本のポップカルチャー — マンガ・アニメを中心として」『人間文化』(6) 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 2008:[1][2]を代表として、ポップカルチャーを積極的に発信する側によって、様々な「クールジャパン」の定義づけが行われているが、ここでは代表的なものを挙げるにとどめる。これらは「特集」であり、様々な論者の報告が掲載されたものであるのでページ数は特に註記しない。一方で、これら「クールジャパン」の言説に対して距離をおいて捉える研究も存在する〔高橋伸一「『ポップカルチャー』という言葉と操作されたそのイメージの流行」『ポピュラーカルチャー研究』京都精華大学表現研究機構 pp.4-33 Vol.2(1) 2008〕。
3. 中川秀樹『サブカルチャー社会学』学陽書房 2002
4. Kinsella, Sharon *What's Behind the Fetishism of Japanese School Uniforms? "Fashion Theory"* pp.215-237 Vol.6 Issue 2 2002:この論考は、日本における制服への偏愛に関する心理的基盤についての論考であるが、そこで「Kogal(コギャル:筆者注) Culture」という現象を取り上げる中で制服ファッションのメカニズムを明らかにしている。そういう意味で、この論考を取り上げた。
5. 成実弘至『20世紀ファッションの文化史 時代をつくった10人』河出書房新社 2007:このジャンルの研究には多数あり、本報告では日本人の著者による代表的な研究を挙げておくことにした。
6. 東伸一[他]『消費社会とマーケティング ブランド・広告・ファッション・クラスター』嵯峨野書院 2007:このジャンルの研究もまた、非常に多岐にわたる。そのため、ここでも近年の代表的な著書を挙げておくに留めることにした。
7. Rocamora, Agnès *High Fashion and Pop Fashion: The Symbolic Production of Fashion in Le Monde and The Guardian* "Fashion Theory" pp.123-142 Vol.5 Issue 2 2001:この研究は、新聞紙上の中で「Pop Fashion」というフィールドが生み出されてくる意味作用についてのものである。こうした High/Pop の区分に関する意味作用に注目が集まるということは、必ずしも、ポップカルチャーとしてのファッションという区別が成立しきれていないという事情を説明するものとして、この研究を取り上げた。
8. 収集した雑誌として『H』(ロッキンオン)などの雑誌、また「森ガール」ブームの火付け役となった雑誌で

ある『Spoon.』(角川グループパブリッシング)などを収集した。これらは今後も収集を続けていく。

9. 工藤雅人 「可能性の中心を造形する読者としての ANREALAGE」『ファッションクリティーク』1号 30 2010

10. Valerie Steele(他)『Japan Fashion Now』Yale University Press 2010:として書籍化されている。